地下鉄サリン事件被害者とその御遺族

浅川 いずみさんの手記

1995年3月20日の朝、妹は地下鉄線の車内の中で猛毒のサリンを吸い込み心肺停止の状態で救助された。連絡を受け病院で妹に面会できた時私は息を呑んだ。一目で重篤の様態がわかったからだ。身体が痙攣し、瞳が見えないくらいぼやけていた。顔は、赤く腫れているようだった。妹の身に何が起こったのか、頭の整理がつかなかった。

数ヶ月後、妹は高気圧酸素治療を受けるため転院した。妹は、少しずつ回復したがサリン中毒の後遺症で視力低下が著しく、やがて私達の顔を見る事ができなくなっていった。地下鉄サリン事件が起こった前日、妹が私の息子の入学祝のランドセルをプレゼントしてくれたのでその日は、久しぶりに両親も一緒に皆で会食しながら私の息子の成長をお祝いしたのだった。しあわせな一時だった。翌日に悪夢の事件に巻き込まれるとは思ってもみなかった。

浅川幸子さん（左）（地下鉄サリン事件以前に撮影）（浅川いずみさん提供）

私達は地獄に突き落とされたも同然なのだ。30年経過した今でも私は、救助され病院のベットに横たわる妹の顔が忘れられない。オウム真理教は、残忍酷薄な行いを犯し大勢の人々を死なせ、傷つけた。オウム真理教の犯してきた事件を忘れてはならない。継承している団体も同罪だと思う。永久的に継承団体を監視して頂きたい。また、サリン事件を知らない世代の人達にこの悲惨な事件を知ってもらい二度と繰り返さないよう願うばかりだ。

（2024年9月記）

過去の手記はこちら